



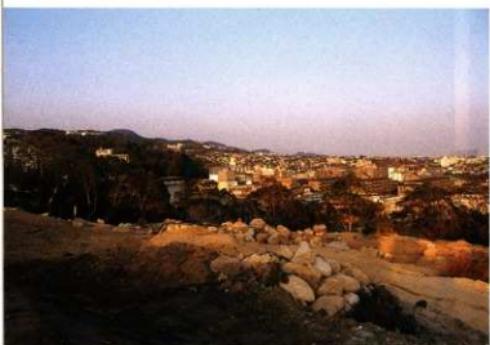
B地区遠景（第 16・21 地点付近・南から）

造成土搬入前は写真左手の道路面より3~4m程度下に現状地盤があった。本格的な調査はできなかったが、要所をトレンチ調査した上、面的な確認調査も一部実施した。



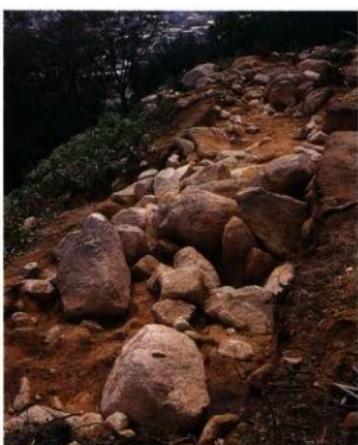
B地区第 21 地点①トレンチ調査前の状況（東から）

台地縁東斜面であり、所々巨礫が散見される。土砂流出に細心の注意を払い、試掘した。石切丁場の早期流出は考えられてよい地形である。



B地区第 21 地点遠景（南西から）

老松町～苦楽園方面を望む。手前の巨礫集積は調査工程で寄せ集めたもの。段丘端の平坦地が広がる。開析谷による侵食がみられない台地が展開している。甲山や住宅街がみえる。



B地区第 21 地点②トレンチ巨礫検出状況（北から）

台地縁に密集する巨礫群。Cタイプの矢穴痕を持つ石材が数点確認された。耕作地開発段階に集められたものであろう。円崩度の高い花崗岩礫が多い。眼下には、西宮市街地の家並みが広がっており、比高は数10mで沖積地と接続する。



B地区第 16 地点盛土確認調査（南から）

3mを越える盛土の下からようやく耕作土を検出した。耕作土より下では、台地斜面の自然堆積層を確認した。台地面上には大規模な石切丁場は少ないものと思われる。不法投棄物を含む盛土（下部）と今回の工事造成土（上部）とは、時間的にも性格的にも大きく異なることが北側セクションの区分でよく理解できる。



B地区第21地点②トレンチ設定状況（南東から）
谷1と谷2にはさまれた丘陵地形の大半がB地区である。



B地区調査状況遠景（北から）
台地端近くに、十字状の確認トレンチを入れて、確認調査が進められた。



B地区第21地点③トレンチ確認調査作業風景（南東から）
多数の花崗岩礫が見い出されたが、加工痕跡は少なかった。



B地区第21地点③トレンチ確認調査完成状況（北西から）
幅4m、長さ約30mで設定した（第105図）。



B地区検出加工石（123号石材）
この台地上の上でも、採石活動の存在を示す元和~寛永期のもの。



123号石材 Aタイプの矢穴痕
角部分（写真上方中央）にかろうじて矢穴の跡が確認できる。



B地区石垣4確認トレンチ（北西から）
前面の平坦地（耕作地）と斜面にも、範囲確認の試掘坑を入れる。



B地区石垣4確認トレンチ出土の花崗岩（北から）
段差地形と花崗岩の巨塊が出土するが、加工痕跡はなかった。



A地区石垣1と平坦面の巨礫遺存状況（東から）

長さ約40mにわたって耕作面の段差を守る石垣。手前は加工のない段丘層の自然縁。洪積層を切って耕盤としている。



石垣に転用されたAタイプの矢穴痕を持つ割石（東から）
近隣に元和～寛永期の石切丁場があった証拠だ。転用石材が多い。



C地区第19地点②トレンチ石垣検出状況（東から）

完全に埋没していた石垣で、矢穴痕は一切なかった。用石は小粒。



C地区第19地点②トレンチ石垣の裏込め土確認トレンチ
調査地でみつかった最も古い石垣。丁場施設に伴う可能性もある。



B地区石垣4耕作面検出状況（北から）

丘陵斜面を切り、小耕作地と石垣をつくっていた。左手は急斜面。



B地区石垣4の基底石に転用された89号石材（東から）

上辺部分に元和～寛永期のAタイプ矢穴痕が見える。90号石材と似る。



B地区石垣4断面裏込め確認状況（北から）

石垣の構築年代や89号石の矢穴痕跡を調べるために、裏側を発掘。



B地区石垣4裏込め土の版築状況
(北から)

徳川大阪城の残石は端材であったため、後亘石垣として再利用された。石垣を1段積むことに合わせ、裏側には小石（栗石）や粘質土を入れて締めていたようすが知られる。大阪層群を母材とする切土の粘土もブロック状に含まれている。江戸時代に遡るか。



A 地区石垣1 南半部の石材転用状況（北東から）
矢穴 A タイプを数多く再利用して積まれた石垣が埋もれていた。



A 地区石垣1 中央付近裏込め確認部分（東から）
土と草木を取り、清掃を加えた石垣1の積み石状況



A 地区石垣1 の構築状況と用石（南から）
加工石の利用石材には、A・C両タイプの矢穴痕がみられる。



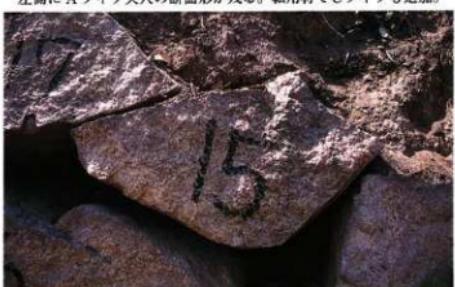
石垣1の12号石材に認められる矢穴痕（南東から）
矢穴型式は A タイプだが、転用材であることが判る。



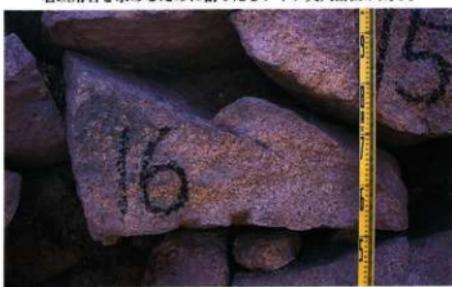
石垣1の13号石材に認められる矢穴痕（南東から）
左側に A タイプ矢穴の断面形が残る。転用材で C タイプも追加。



石垣1の14号石材に認められる矢穴痕（南東から）
石垣用石を求めるために割ったC タイプ矢穴断面が残る。



石垣1の15号石材に認められる矢穴痕（南東から）
下辺部分にC タイプ矢穴の断面形が確認できる。剖面向ける。



石垣1の16号石材に認められる矢穴痕（南東から）
下辺部分のC タイプ矢穴の半截矢口が残る。間隔は広い。



A 地区石垣1検出状況（南東から）
耕作地段差に使われる割石。近傍の石切丁場を予想させる。



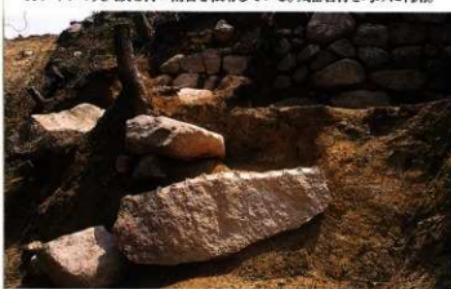
A 地区石垣2検出状況（南東から）
割石と自然石を組み合わせた石垣。谷1の左岸側に存在。



A 地区石垣1 58号石材検出状況
A タイプの矢穴痕を持つ削石を転用している。残留石材を巧みに利用。



A 地区石垣1 59・60号石材検出状況
A・C タイプの矢穴痕を持つ削石の組合せ。時期差をもつ矢穴痕。



B 地区石垣4付近検出 90号石材（東から）
石垣4の基底石 89号石材と同一母岩の可能性が高い遊離石材。



A 地区谷1検出 85号石材
原位置を保っておらず、84号石材と接合する。石垣用に供されたか。



C 地区谷2左岸検出石垣（東から）
C タイプの矢穴痕が散見され、新田開発時の構築であろう。比較的均質な大きさの加工材を主用しており、前面の耕作面は狭い。



C 地区谷2右岸検出石垣
A タイプの矢穴痕を持つ削石はまったく合まず左岸に似た様相である。元和～寛永期の石切丁場から少し距離をおくのである。



E地区 110・111号石材発見時の状況 (東から)

台地縁東斜面で検出し、遺存状況から原位置を保っていると判断した。斜面上方から僅かに顔をのぞかせた矢穴が、この石材発見の契機をなした。遺跡の広がりが想像を超えて広いものと判断された。



E地区 110・111号石材発見時の状況 (遠景・東から)

木々の生い茂る中、矢穴痕が僅かに見える。当時の石工達も、この様な環境のもとで石切に適する母岩を求めて歩いたのであろう。丘陵の採石活動が末灌叢の低位斜面でも行われていた。



E地区 110・111号石材下草・表土除去後の状況 (東から)

緑地帯として残るため、掘削を伴う調査は行わず、石材の遺存状況のみを清掃、確認した。上の写真と比較してみて欲しい。第 88 図参照。



E地区 110・111号石材下草・表土除去後の状況 (西から)

石の日と合致せず、段状に割れたために放置されたと思われる。基本は類例多い中央均等の二分割技法で割る意図があったものだ。



B地区 87号石材検出状況 (東から)

2本の矢穴列を設定しており、需要石材の規格が推測できる。矢穴列の内々間距離は 53 cm を測る。第 87・128 図参照。ノミの下取り線に注意。



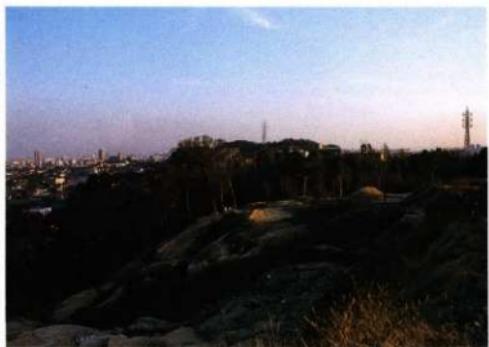
B地区 87号石材 (左手奥) と 88号石材検出状況

点在廻丁場で、採石上坑を検出した 87・88 号石材は接合関係にある。88 号石分割後に、87 号石は横転していることが判る。



C地区調査前の田畠跡風景 (北西から)

本発掘調査T区付近の旧貌で、当地域には造成盛土は撤入されていない。耕作地が放棄された状態にある。ここにも石切丁場や割印石が眠っていた。



C地区谷2左岸より西宮市街を望む (北から)

中央奥の盛上りが高塚山丘陵である。確認のための調査トレンチをあけ始めた状況。八十塚古墳群の縁辺部になるが、丘陵の縁には横穴式石室墳は認められなかった。



C地区第16地点①トレンチ (北から)

耕作土から - 50 cm のレベルで、礫の密集が観察できた。東壁面に矢穴痕をもつ断材片が突出し、丁場の存在をうかがわせる。削面をもつ花崗岩には、人為的な様相をもつものがある。



C地区第16地点②トレンチ (北西から)

Cタイプの矢穴によって、耕盤より上に位置する部分のみ水平にカットしている。耕土下にこのように多数の石材が埋没していたのは意外だ。石切丁場を新田開発に利用していった様子が知られる。



C地区第16地点③トレンチ (北西から)

対になる割石 (Cタイプの矢穴痕) が除げずに耕盤の下に埋め込まれている。2つの石材はこの場で切断されたものである。



C地区第16地点⑥トレンチ (北東から)

このトレンチでは、矢穴痕の認められる石材はなかった。丁場には、割石材の見当たらないこうした空白域が存在する。

C 地区 第 17 地点①トレンチ試掘状況
(北から)

C 地区の台地縁端に設けられたトレンチで、右手には比高 2m 前後の段差がみられ、耕作地が展開する。左手は竹ヤブとなり、急傾斜した斜面の下からは西宮市の市街地と接続する。事業地の南端近くのところ。確認のためのトレンチは、この南側に 2 本設定し、地形の変化などを調べた。

奥手は宮川の支流である通称「どんどん川」が流下する。その川底でもかつて刻印石が確認されている。

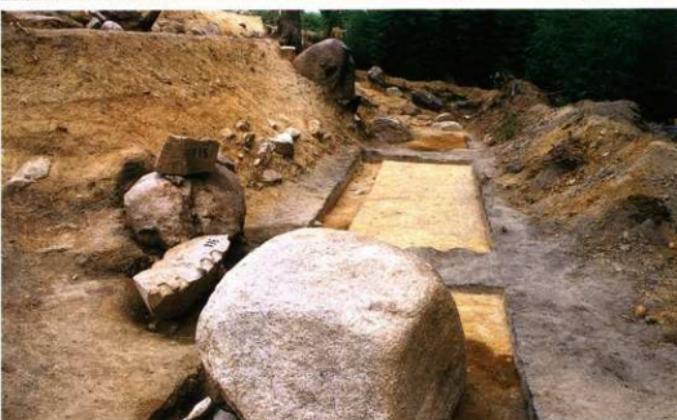


C 地区 第 17 地点①トレンチ試掘状況
(南から)

同トレンチを反対側から見たところ。手前には往 1.3m の花崗岩礫が転石の状態で存在。その斜面側から出土した数石も動いているが、2 石の矢穴痕をもつ石材が含まれていた (115・116 号石材)。

このうち、116 号石材には、A タイプの矢穴痕のみならず、刻印が彫られていた。

左手は、切土により段差が形成されており、洪積層は大きく 3 つに分かれる。下部は角礫の包含が顕著である。



C 地区 第 17 地点①トレンチ刻印石、
矢穴痕をもつ石材出土状況 (東から)

刻印石や A タイプ矢穴痕のみられる石材 (115・116 号石) の出土状況は、自然石を混えて無秩序であるが、すぐ近近ないしは、この平坦地が作業丁場であるかのように、多量のコッパが伴出した。作業面造成型の石切丁場がこの平地にあったとみられる。トレンチ内西区の状況。ベースは疊の混じる黄褐色の花崗岩風化粒混じり土層。コッパはその上から左手奥にかけて、満った土砂とともに投棄されたように堆積する。





第10地点④トレンチ 3号石材（東から）
上方の石切丁場跡から滑落してきた加工石材でAタイプの矢穴をもつ。



第10地点④トレンチ 3号石材（北西から）
滑り落ちてきた時期は、江戸時代に遡る可能性がある。長軸長19mを測る。



谷1から第9地点をのぞむ（北から）
急斜面地ながら、点在型の石切丁場跡がみつかった（第86図）。



第9地点①トレンチ 42号石材（北から）
2列の矢穴列をもつ自然石。段丘疊層からの転石を利用している。



第9地点①トレンチ 42号石材（東から）
矢穴列を追いかけながら、自然石を母岩とする42号石材を発掘。



第9地点①トレンチ 41号石材（北東から）
長軸2.25mを計測する巨大な端石で、斜面を滑落している。



A地区谷1 108号石材（西から）
矢穴列の打面整形をした典型形態の端石（残材）である。



B地区 90号石材（東から）
この石材も裏側が自然面をなす端石で、廃棄されたもの。



第10地点④トレンチ 3号石材（北東から）
3号石材は、上方斜面の丁場から滑落したもので、矢穴列痕が目立つ。



第10地点②トレンチ 遠景（北から）
この付近では、石材加工の証拠となるコッパのみが多数出土した。



第18地点①トレンチ設置状況（北から）
調査地最南端に設けられたトレンチ。近傍をどんどん川が流下する。



第18地点①トレンチ（北から）
このトレンチからは採石痕跡は確認できなかった。



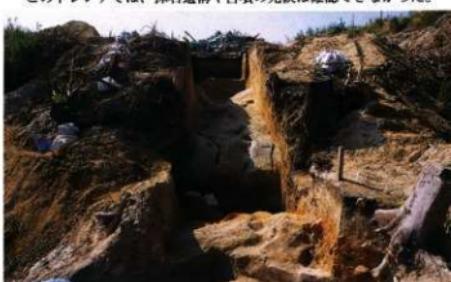
B地区斜面域確認トレンチ 87号石材採掘土坑
この石材にも、石の厚さや形状を見究めるための穴が掘られていた。



A・B地区境界付近の確認トレンチ（北から）
このトレンチでは、採石遺構や古墳の兆候は確認できなかった。



第16地点③トレンチ 101号石材（北東から）
耕土直下に存在した巨礫の上部をCタイプの矢穴により割り取り、
耕盤として生かしている。



第20地点⑤トレンチ完堀状況（北東から）
幅2.0m、長さ10.5mのトレンチで、古墳の存在確認を行った。